

# ドル/円相場のトレード戦略

## 【ドル/円 週足】



### ■中期展望

昨年 2018 年のドル/円相場は、当初想定していたように 2017 年と同様のレンジ相場が継続しました。

年間の値幅は 10 円を下回り過去最少、2017～2018 年の 2 年間を通して値幅は 14 円に満たず過去最少となり、市場のボラティリティから収益を得ようとするディーラーにとっては極めて厳しい環境となりました。

その大きな要因としては、絶好調だった米国の経済状況にもかかわらず、年初に米国の政策への不透明感からドルが下落したこと、そして年末には米金利のフラットカーブ化やそれに伴う米国株式の大幅下落、米中貿易摩擦の激化などのリスク要因が相次いだことでドルの上値が抑えられたことが挙げられるでしょう。

米国経済が強調であり利上げ予測が続くためにドルロング・ポジションが蓄積される中でもドルが大きく上昇しないという現象は、ドル高派にとって想定しにくい状況であったと思われます。

そのため、本年年明けの 1 月 3 日に 108 円を割り込むと損切りのドル売りを巻き込みながら、ドル短期に 4 円以上の下落という動きが引き起こされました。

その後、1 月の米 FOMC では声明文から追加利上げのバイアスが削除され利上げ継続という政策スタンスが大きく変わったことにより米国株式およびドルは持ち直しました。

また、米経済指標は好調を維持するものも多く、良好なファンダメンタルズのなか金利が低位安定

# ドル/円相場のトレード戦略

するという適温相場が再び始まったとの期待が強まりました。

さらに6月のFOMCで米国が利下げ方向へ政策変更したことが明確となり、実際に7月のFOMCでは10年ぶりの利下げが実施され、9月のFOMCでも追加緩和が実施されたことでドルの上値は重い動きとなっています。

ただし、米国の追加利下げ観測が残るものの、その下げ幅は限定的との見方が強まり、また米国景気はまだ雇用を中心に成長を維持しており、ドルが一方向的に売り込まれる経済状況にありません。したがって、当面は105円～108円水準で、次の方向性を探る動きが続くそうです。

## ■短期展望

先週は、108円水準でスタートした後、週初はドル買いが優勢となり、108円47銭の高値を記録しました。

しかし、ISM製造業景気指数はじめのADP雇用統計、ISM非製造業景気指数など予想を下回る米経済指標が続いたことにより106円台まで下押し動きとなり、週末の米雇用統計では上下に揺さぶられたのち107円割れ水準で週を越えました。

今週も米経済の先行き不透明感も燃るためドルの上値が重くなりそうですが、週後半に米中閣僚級通商協議が予定されており様子見の動きが強まりそうです。

したがって、今週のレンジは、106円～108円を想定します。